

## 麻田藩主最後の巡見

明治2(1869)年2月13日、麻田藩第14代藩主青木重義あおきしげよし一行が高平地区に到着しました。江戸時代を通じて小柿を除く現・高平地区は、豊島郡麻田村(現・豊中市蛸ヶ池中町)に陣屋をおく青木氏が支配していました。同藩は規模を示す石高が1万石あまりで領地が各地に分散していましたが、高平地区はその約四分の一を占めていました。また第2代藩主青木重兼は日本の黄檗禅おうぼくの開祖である隠元いんげんから端山たんざんの号を授与され、現在の末吉・方廣寺ほうこうじの地で仏道に励みそこを墓所とも定めました。このような由緒により、麻田藩主はたびたび高平地区を訪れたのです。

結果的に藩主として最後の来訪となる明治2年のてん末については、当時の大庄屋と木器の庄屋の記録が残されています。両者は市史第4巻に361・362号として掲載されています。読み比べるとそれぞれの視点の違いや本音が見え隠れし、興味深い史料です。藩主一行は2月13日に支配が同じであった波豆(現・宝塚市)に到着し、下槻瀬れんげじの蓮花寺で宿泊しています。端山の忌日きにちである翌日(命日は9月14日)は酒井の荷月宮いづきのみや(高売布神社)を経て十倉で地元の主だった人々の挨拶をうけたあと方廣寺に参詣し、川原の観福寺かんぶくじに宿泊しています。15日は早朝5時頃に出発して十倉から三田藩との領地境を確認したあと、下里・下槻瀬・波豆川を経て大原野(現・宝塚市)に出ています。この間に木器では新田を確認しています。

ところで大庄屋の記録には、藩主の高平訪問はこれまで(端山の)御廟参ごびょうさん(墓参)名目であったが、今回は御巡見との趣旨であると記されています。当時は大名が土地と人民の支配を新政府に返上する藩籍奉還の動きが始まる一方で、文化面では神仏分離が強力に進められ、それにもなって廃仏の風潮も広がり始めていました。麻田藩主の高平訪問は内容的には領内の巡見にほかなりませんが、江戸時代の史料には「御廟参」と表現されています。そこには青木氏なりの思いが込められていたと思われますが、明治2年の社会情勢びょうしよは廟所寺院への参詣を表に出すことをはばからせたのです。このように明治維新は人々の内面に対する変革をも迫るものだったのです。